朝鮮通信使迎接に関する研究
ー福山市鞆の浦を中心としてー

K02064　高田　悠

1、研究目的と背景

現代に生きる私達にとって、国際交流の必要性は非常に高い。文化交流だけでなく、世界平和の下に人権平等を目指した国家間の交流は無視できない。

日本は古くから隣国である韓国や中国との関係が深い。その中で、江戸時代の鎖国下において、唯一の正式な善隣友好の関係にあった朝鮮との交流は、両国にとって大変重要であった。また、現代人にとって、暗い過去のイメージにより日韓の間には深い溝があるように見えている。しかし、近年、スポーツ・芸能やメディアを通して日韓の文化交流が活発に行われ始めてきた。近世唯一の国交関係にあった朝鮮からの通信使の跡をたどることは、今後の交流を深める役割を担うと考える。

江戸時代を通して、善隣友好の関係であった朝鮮からの通信使が寄港、逗留した町は全国に数多く分布している。しかし、通信使施設を建築史や都市史の視点から研究をされ始めたのは最近のことであり、あまり解明されていない。本研究では、三使が宿泊した施設が現存する広島県福山市鞆町の朝鮮通信使宿泊施設の状況を考察し他都市の迎接施設との比較を行おうと思う。

2、研究の方法

① 鞆の浦における朝鮮通信使宿泊施設を明らかにし現存状況を整理する。

② 福禅寺所蔵『二六時中雑話、天和二年朝鮮人来朝手筈之写』(天和2年＝1681)、福山市鞆の浦歴史民俗資料館所蔵『朝鮮人大行列記』(延享5年＝1748)、『備陽六郡志　後得録・分郡鞆津』(宝暦 14 年＝1764)の分析。各年代の朝鮮通信使の宿泊施設を解明する。

③ 朝鮮通信使、対馬藩士等の宿泊施設の分布模様を分析する。

④ 朝鮮通信使の宿泊施設の調査を実施する。
実測調査により日韓共通の遺産として建築的基本資料を作成する。また痕跡図より昔の平面を復原する。

表1. 実測対象寺院

	顕政寺	善行寺	南禅坊	正法寺	淨泉寺
所在地	鞆町後地	鞆町後地	鞆町後地	鞆町鞆	鞆町鞆
調査実施日	H17.7.28	H17.7.28	H17.7.29	H17.7.29	H.17.7.30

⑤ 他都市の迎接施設との比較を試みる。

3、鞆の浦と通信使

鞆は、広島県の南東、沼隈半島の先端に位置する港町で、瀬戸内海の中央にある。鞆町は江戸時代、福山藩に属し、鞆の津といい、大阪に上る船も九州に下る船も満潮に乗って鞆港を出る風待ち・潮待ちの要港であった。近世の港の遺構をよく残し、町並みにおいても建物・路地に当時の面影がかいま見える。

通信使一行はまず日本の対馬に船で渡り、対馬藩の宗氏の同行で、九州の関門海峡より瀬戸内海を経由して大阪に入る。その後、京都・大津・彦根を経て中仙道、そして東海道を下り江戸まで向かった。

図1. 朝鮮通信使経路図

鞆に最初に寄港をみたのは、慶長 12 年(1607)で、接待の費用に堪えかねて対馬で受けるようになるまで、最後の宝暦 13 年(1763)まで前後 11 回(通信使は文化 8 年(1811)の全12回。12回は対馬まで。)の寄港をみている。

朝鮮通信使正使の宿舎には、福禅寺があてられるのが慣わしであり、福禅寺客殿の対潮楼が接待場所として用いられた。通信使師団の編成は、正使のほか、副使・従事・上々官・製述官・上判事・上官・次官・中官、下官と、総勢数百名を超えた。これに対馬藩宗家の家臣が加わり、福山藩からも接待に家臣がくり出している。その

指導教員　伊藤　洋子 教授

ため、町中の寺々は随行の者の宿舎となり、対馬藩宗氏家臣、福山藩士の宿舎には鞆の商家が割りあてられた。

4、迎接施設とその配置について

4－1　迎接施設

朝鮮通信使が鞆の浦に寄港した際宿泊した施設について、天和2年(1682)については『二六時中雑話、天和二年朝鮮人来朝手筈之写』、延享5年(1748)については『朝鮮人大行列記』、宝暦 14 年(1764)については『備陽六郡志　後得録・分郡鞆津』より明らかにし、下記の表に示す。

表2. 宿泊施設 天和2年(1682)

三使	福禅寺
上々官	福禅寺
上判事	御茶屋
学士官	御茶屋
上官	御茶屋
次官	阿彌陀寺
中官	阿彌陀寺・南禅坊
下官	西・東小屋
霊長老	猫屋
通詞	阿波屋
對馬守	土佐屋
宗家家老	小代屋・尼崎屋

表3. 宿泊施設 延享5年(1748)

三使	阿彌陀寺
上官	南禅坊
下官	明圓寺
御代官	法宣寺・増福寺
大通詞	正法寺
通詞	慈徳院・勝音寺・本願寺
宗家家老	顕政寺・妙蓮寺
通詞下知役	善行寺
長老	静観寺

※網掛けは実測寺院

表4. 宿泊施設 宝暦 14 年(1764)

三使	福禅寺
上々官	淨泉寺
上官	淨泉寺
次官	淨泉寺
中官	地蔵院・淨泉寺
下官	明圓寺
大通詞	山崎や
通詞	本願寺・勝音寺・正法寺・高松屋・門屋・材木屋・小倉屋

4－2　配置状況

鞆の浦は背後に山が迫り、町の中心部には余地がなく、新たに迎接施設を建てることが困難なために既存の外交施設であった本陣（大坂屋・土佐屋)、御茶屋が利用されていた。これだけでは、一行を収容することができないために、町の中に広く散在する形になっている。これは鞆に多く存在する寺院が通信使の各官位、藩士ごとに細かく迎接施設として当てられていたことによる。寺院は主に山側に20近く配されており、寺院通りを形成している。この通り沿いの寺院を当てたのは寺院が数多く存在する鞆を象徴する空間を見せる目的があったことが伺える。本陣、御茶屋をはじめ客殿対潮楼は港から入ってすぐの中心部に配置されており、鞆の浦における明確な外交中心部として形成されている。また、この中心部である港湾部は屋敷地等級が高くなっているため、港湾部の中心である道越町や都市軸である関町の大規模商家が迎接施設とし当てられた。

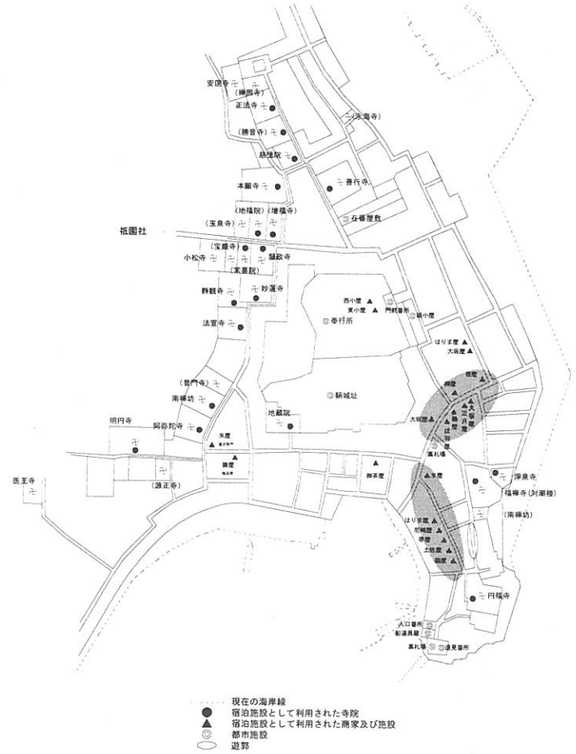

図2. 元禄の鞆の浦

5、実測調査

5－1　顕政寺（本堂）

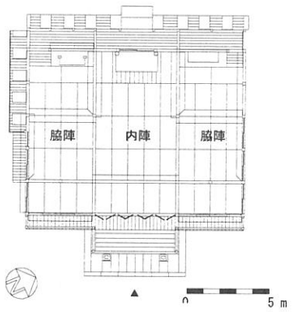

図3. 顕政寺本堂平面図

寿福山顕政寺。慶長年間(1596～1614)の創建と伝えられる。建立は 19 世紀前期（文化～天保)と思われる。屋根は桟瓦葺の平入り、入母屋造り。平面構成は、内陣両脇に脇陣をとる。

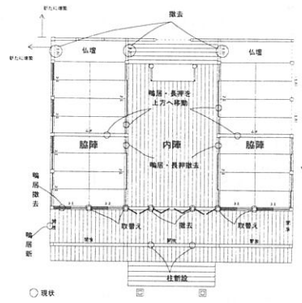

図4. 顕政寺復原図

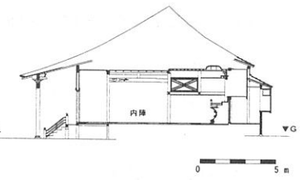

図5. 顕政寺本堂断面図

5－2　善行寺（本堂）

護法山善行寺。建立は 18 世紀中期（享保～宝暦）と思われる。（安永再建と伝えるのは内陣仏壇改造のためか）元禄３年(1690)には梵鐘があったが、幕末に供出して今は鐘楼のみ残る。桟瓦葺の入母屋造り、当時は本瓦葺。平面は３間通りの外陣をとり、外陣後方には２間四方の内陣、その両側に余間を配する。

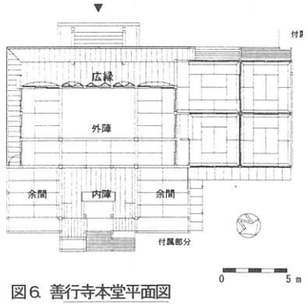

図6. 善行寺本堂平面図

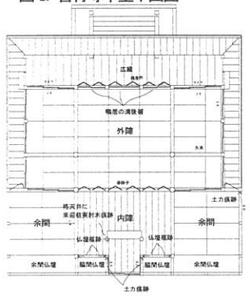

図7. 善行寺復原図

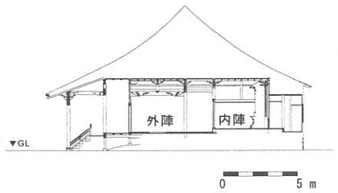

図8. 善行寺本堂断面図

5－3　南禅坊（山門）

上・中官の宿舎にあてられた南禅坊本堂は火災焼失し明治に再建された。通信使時代の遺構は山門である。２階建てのこの山門は、上層の梁に鐘を吊った形跡があるので「鐘楼門」である。二層には縁が廻るが高欄を欠く。入母屋・本瓦葺である。瓦は古く、鐙瓦・軒瓦に慶長期～寛永期のものと文化年間(1804～1818)のものがある。

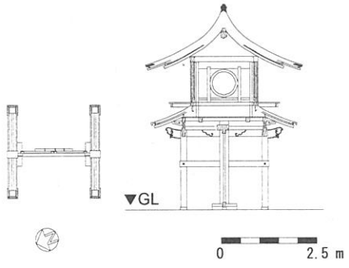

図9. 南禅坊山門平面図および断面図

5－4　正法寺（本堂）

大雄山正法寺。建立は江戸時代中期とされる（間取りより）。江戸時代、朝鮮通信使の常宿であり、それに関する資料も発見されている。屋根は桟瓦葺の入母屋造り。平面は奥行き２間の室中、上間は２間×２間半で床を配している。

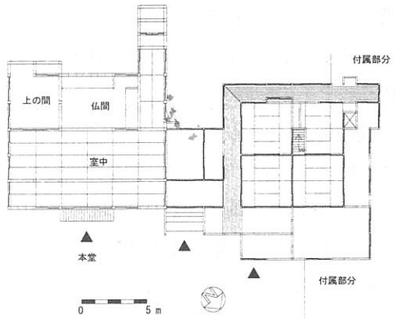

図10. 正法寺本堂平面図

5－5　淨泉寺（本堂）

海寶山淨泉寺。創建は江戸時代前期、元和年間(1615～1623)と伝えられる。桟瓦葺の寄棟造り。平面は２間通りの外陣をとり、外陣後方に２間四方の内陣、その両側に脇の間を配する。

図11. 淨泉寺本堂平面図

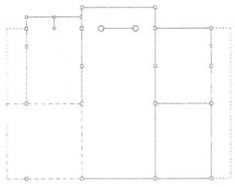

図12. 淨泉寺復原図

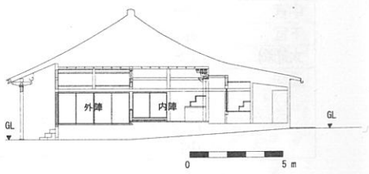

図13. 淨泉寺復原図

6、他都市の迎接施設との比較

6－1　三使に関する部屋の比較

迎接するにあたって、迎接施設においては高官位である三使に関係する、三使饗応の間・三使休息の間を第一とした配置となっている。瀬戸内における迎接地では、絶景を望むようなかたちで饗応の間が配されている。また、この饗応の間は 25 畳前後の広い空間であり、畳廊下で囲まれている。鞆の浦の対潮楼においては「日東第一形勝」と扁額が残されるほどの絶景を誇っていた。

三使休息の間は三使饗応の間の近くに置かれ、他の部屋よりも格の高い部屋が割り当てられている。特に正使には床の間や書院を擁した部屋が当てられている。また、独立した厨房や湯殿・雪隠が配されているのが主である。

6－2　施設配置についての空間比較

鞆の浦や彦根においては御茶屋・本陣といった藩施設が存在するものの他都市ほどの充実した藩施設が少ない。そのため、都市に多く散在する寺院を中心に町屋をも迎接施設として当てる「寺院分散型」をとっている。また、散在する寺院や町屋を迎接施設として当てることで、都市全体が朝鮮通信使接待の意識を持ち、外交都市としての意味合いを強くしている。

赤間関は寺院を当てているという点に関しては鞆の浦と彦根と同様であるが、散在する形では当てられていない。こちらは２つの寺院と隣接するように新築された小屋に収容する「寺院集約型」をとっている。

上関や下蒲刈、牛窓においては御茶屋及び本陣を中心とした藩施設がそろっており、通信使来航に合わせてそれぞれの施設に付属するような形で各官舎を配置している。つまり、こういった藩施設を状況に応じて増改築し迎接施設として当てる「藩施設中心型」をとっている。このことは施設間の動線短縮につながり、通信使一行や接待関係者への配慮がうかがえ、合理的な割り当て方をとっていることがわかる。

一方、厳原はこれまでの都市とは違っている。幕府使者の宿泊所としての屋敷が点在しているだけで、対馬藩士や他藩士、護衛の人々のための施設が必要でなかった。そのため朝鮮側のみの接待に専念することが出来た。つまり「通信使専用型」であったと言える。

こうした朝鮮通信使寄港地等における通信使接待への配慮の違いが、施設配置の空間的違いが生まれたのであろう。

7、総括

鞆の浦には、数多くの寺院が宿泊施設として利用されてきたが現存しないものや近代に改修されてしまったものも多い。しかし、福禅寺をはじめ朝鮮通信使の遺構として価値のあるものが残っている。

江戸時代を通して大行事であった朝鮮通信使来訪は文化８年を境に途絶えてしまったが、訪れた町に与えた影響は多大であったということは確かなことであり、それが都市の構造にも影響を与えたということには違いない。

≪参考文献≫

『福山市史／中巻・下巻』福山市史編纂会編　1983 年
『瀬戸内の町並み：港町形成の研究』谷沢明　未來社 1991 年
『鞆の町並：福山市鞆町町並調査報告書』福山市教育委員会　1976 年
『近世日朝関係史の研究』三宅英利　文献出版　1986 年
『近世の遺構を通して見る中世の居住に関する研究』
新住宅普及会住宅建築研究所 1985 年
「江戸期港町における迎接施設の復元と再生に関する研究」
伊藤久子　芝浦工業大学大学院修士論文 1999 年

表5. 三使に関する部屋の比較

	厳原 客館和陽館	赤間関 阿弥陀寺	上関 御茶屋	下蒲刈 上之御茶屋	鞆の浦 客殿対潮楼	牛窓 御茶屋	彦根 宗安寺
三使饗応の間	×	24 畳 内縁・外縁付き	18 畳 縁間付き	20 畳 縁間付き	30 畳 縁付き	35 畳 縁付き	×
正使休息の間	7 間×4.5 間 規模のものを 建造	8 畳 床付き	12 畳 書院・床付き	15 畳 床付き	8 畳 床付き	9 畳 床付き	15 畳 床付き
副使休息の間		10 畳	15 畳	15 畳	8 畳	9 畳 床付き	
従事官休息の間		12 畳	10 畳	8 畳	—	9 畳 床付き	
備考	独立炊事場	独立湯殿 ・雪隠付き	独立炊事場付き	独立炊事場 ・湯殿付き	—	独立湯殿 ・雪隠付き	独立炊事場 ・湯殿付き

表6. 雁木または町の入口からの宿泊施設までの距離

	厳原	赤間関	上関	下蒲刈	鞆の浦	牛窓	彦根
三使施設	410m	110m	170m	60m	200m	280m	460m
低官位施設	370m	300m	70m	80m	740m	260m	460m
役人等施設	1300m以内	—	430m以内	140m以内	740m以内	450m以内	650m以内
備考 （三使に関して）	新たに建造	既存を増改築	既存を増改築	既存を増改築	新たに建造	既存を増改築	既存を増改築
類型	通信使専用型	寺院集約型	藩施設型	藩施設型	寺院分散型	藩施設型	寺院分散型